

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

## 2016(28)年 週 報

9月25日

「夫婦一心同体」

第四聖日

第 3474号

聖  
言

私たちはキリストのからだの部分だからです。それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。 エペソ 5ノ30、31

### 本部一〇月行事計画

二日(日) 礼拝後定期役員会  
七日(金) 楽しい祈りの集い 午後一時  
九日(日) オープン礼拝 午前一〇時

神戸フィラデルフィヤ教会牧師 大嶋善直先生

一〇日(月) 午後二時、福音コンサート

一三日(木) 納骨堂掃除 午前一〇時

一七日(月) 神戸朝拝会 午前七時 三宮教会

二四日(月) 説教塾 午前十一時 神港教会

三〇日(金) 大日丘集会 午後五時

※十月会計役員 庄司姉 榎原姉

一〇月召天会員

一日北良道子姉二〇周年 二日梶原靖生兄三〇周年

四日藤沢澄子姉一八周年 五日早瀬信明兄一六周年

一二日佐野杉松兄八五周年 佐野鶴市兄八五周年 小

段スミ姉三一周年 守屋元兄四六周年 一四日森勝兄

七六周年 三永正雄兄四二周年 一五日山川美与子七

八周年 一八日津田誠一兄七一周年 一九日山村むつ

え姉七二周年 二〇日岩島祥博兄三二周年 二四日

仲里朝用兄五四周年 河田ナオ姉五〇周年 二五日

市原たつ姉四三周年 紺本薫先生一三周年 二六日

松川栄次兄二六周年 二八日田村博兄一五周年 二九日

早瀬今四郎兄八六周年 三〇日石本淳兄二五周年 前

川幸子姉二二周年 三一日北田ユキ姉一〇五周年

※ 召天会員の御遺族は納骨堂周辺の掃除をお願いします。

イエス・キリスト聖成伝道教会・東洋聖書神学院・聖成基督教団

牧師 山本 稔 〒653-0812 兵庫県神戸市長田区長田町1丁目2番6号

電話：FAX (078) 691-1419 郵便口座番号 01170-3-20374

<http://jchec.org/>

[minoru\\_yamamoto@hotmail.co.jp](mailto:minoru_yamamoto@hotmail.co.jp) メール [m7-inoru@ezweb.ne.jp](mailto:m7-inoru@ezweb.ne.jp)

「妻を愛するは自分を愛する」

「そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。」(エペソ五ノ二八、二九)

祈り

「シモン、シモン、見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、私は、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったなら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ二ノ三十一、三二)。神様、台風の影響で天候は悪いのにかかわらず、愛する兄弟姉妹を御前にお送りくださり感謝します。さまざまな悩みと重荷を抱えて御前に集う私立ちひとり一人に格別に聖霊を注ぎ、サタンに奪われた信仰を回復させてください。そして、復活の力に満たし、神と人を愛して全霊全身をもって仕えさせてください。

このたび、私の不徳によって、神と信者に対して深い悲しみと分裂に至らしたことを懺悔します。どうか、相手が謝るなら赦すというのではなく、悪くなくても、ごめんなさいのひとことをいって和解していただきたいと願います。まずわたしから、ごめんなさい。もう二度といたしませんと一人一人にお詫びいたします。憤慨されるかもしれませんが、私にはそれしかできないのです。おゆるしくください。

夫は自分のからだのように妻を愛しなさい。これは自分と妻は一つであるという意味です。チョンガにはわかりませんが、夫婦はいつも一つです。おきているときも寝ているときも、たし

かに仕事をし、子どもの世話をしなければならぬけれど、一緒にいないけれども、妻は自分のからだですから、体をいたわるということと妻をいたわるということはコインの裏表です。

28節の自分の肉を憎む者はいない。命と言わず、肉といっているのは、この世で生きるうえの体です。最近も隣のご主人が救急車で病院に運ばれましたが、召されました。骨と皮のようになっていたそうです。自分の体を憎んではいけないと思うのですが、健康管理が充分していなかったと思います。たばこはすう。

お店をしていたから、昼は食堂で食べる。最終的には腫瘍ができて、衰弱死です。また、若者のなかに自傷行為が多くなっています。それに加えて薬物も自傷行為の一部であります。スマホの普及で手軽に薬物が手に入るので、若者に薬物が蔓延しているのです。わたしたちの若いコロ、いまから50年前は裸体の雑誌を貪り見て、母親に見つかり、エロ人間と言って叱られました。本来なら自分の欲望を制御できず体を傷つけてしまうのです。また自傷行為の一つである拒食症は人から「体形が悪い」といわれてから、やせるために食事を制限して最後には食べ物を受付なくなり、体にダメージをきたすのです。このように自分の体を憎むものはいないといながら、多くの人々は自分の体を痛めているのです。その原因の一つは自分の体は神様から与えられたということをしらないからです。またコリンとにはからだの聖霊の宮であるとあります。

最近も歌舞伎役者が不倫をしました。かれはじぶんのからだのように妻を愛していないのです。これは既婚者だけではありません。幼児虐待の大きな原因は望まない妊娠をした結果の割合が多いことが分かりました。欲望だけで、結ばれると特に女性は体にダメージを負うだけでなく、子どもにも悪影響を及ぼすのです。

自分の身を憎んだ者はいません。とはどういうことでしょうか。それはエバがアダムのあばら骨で造られたように、自分の身

をあいするとはエバを愛すること。まもることにつながるのです。反対にエバも自分の身を愛することはアダムを守ることでです。ゆえに自分の体は自分のものであって、伴侶者にもなのです。だから、自死は伴侶者を巻き込むのではありません。ではチョンガはどうするか。

「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子とすることができません。自分の十字架を負ってわたしについてこない者は、わたしの弟子となることはできません。」(ルカ福音書 27) 自分の命までも憎みなさいとすごいことを書いています。

これは、優先順位をはっきりさせるということです。その上で妻を愛し、夫を自分のごとく愛するのです。そうするならば真の祝福が与えられます。祝福があたえられなくてもそれ以上の喜び、キリストと教会は永遠の契りで喜びに満たされるのです。死も病もサタンも彼らを切り離す事はできないのです。

二〇一六年九月二一日午後六時半 祈禱会 山本稔牧師  
「慄きつつ主に近づく」ホセア二章

「主は私に仰せられた。『再び行って、夫に愛されていながら姦通している女を愛せよ。ちようど、ほかの神々に向かい、干しぶどうの菓子を愛しているイスラエルの人々が主をあいしておられるように。』」(ホセア三ノ一)

三、背く者に対する神の愛の勝利 三ノ一〜五

一ノ一〜九とおなじように、この章も預言者の象徴的行為とその解釈とから成っている。象徴的行為そのものは現実の出来事であるから、一章と同じく、比喩的な物語と解することは誤りである；また、象徴的行為はこれを命じた神の言葉に関連する部分だけが意味を持つのであるから、預言者の伝記的記録として理解することは的はずれである。しかし、一章と三章は互いにどういふ関係にあるのだろうか。一章と三章は同じ事柄を、一方は三人称で、他方は一人称で記しているものとするこ

ができるであろうか。三ノ一の「女」には定冠詞がなく、またこの女が「姦通している女」と言われていることは、この見解にとつて有利な点である。しかし、「再び行って」という句が、一章と三章を同一の事件と見る見方を不可能にする。三章における姦通は、ホセア自身に対しての不貞行為であり、一章とは区別される。一章の三人の子供はホセアとの間に生まれたものであり、ホセアに対する裏切りは直接取り上げられていない。したがって三章は一章よりの後の出来事であると解さなければならぬ。確かに、一節の「女」には定冠詞はないが、「再び」を重視すれば、この女は一章のゴメルであると言うことができる。二ノ二〜二三に述べられているヤハウエとイスラエルの関係は、一章におけるホセアとゴメルの関係を適用したものであるが、一章には現れない関係の回復、和解のことも二章は含んでいる。三章は再び現実のホセアの夫婦関係の話に戻り、その中で起こった離別と和解のことが取り上げられる。回復は一挙になされず、ゴメルの愛のきよめの段階を経て、試験期間の後、除けられた。

#### 【中国の賛美】

ワヨーション シン シン モー ワデイ パークソン ハイライ

ワデイ パーゴ シトイエ ヤファー

カーヨン ダルヨゴスンジヨ アーメン

我要向山举目 我的幫助 从何而来？

我的幫助 我的幫助 从造天地的耶和華而來。祂必不叫 你的

脚搖 劫保你的必不打盹、必不打盹。

私は山に向かつて目を上げる。わたしのたすけは、どこから来るのだろうか。

私の助けは、天地を造られた主から来る。

主はあなたの足をよるけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。(詩篇一二二編)